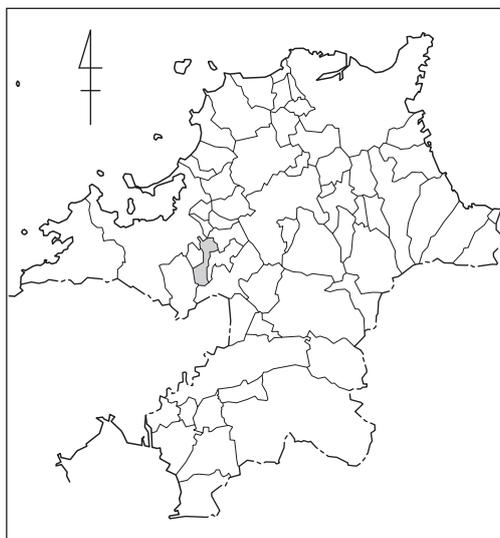


石勺遺跡 8

—O地点の調査—

大野城市文化財調査報告書 第179集



2020

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。市域は南北に長く、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡の国指定史跡をはじめ、数多くの歴史遺産があります。

今回報告する石勺遺跡は、市の中央に位置し、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されています。なかでも弥生時代中期には集落や甕棺墓などが広がり、人々の営みが色濃く残されています。当時は春日市須玖丘陵を中心に「奴国」と呼ばれるクニが形成された時代であり、石勺遺跡もその一翼を担っていたと考えられます。

今回の調査でも、大量の弥生時代中期の土器が出土しましたが、その出土状況から、遺跡の立地が時代と共に変わっていく様子を明らかにすることができました。

本書が学術研究はもとより、広く一般に活用され、地域史の解明や歴史教育の一助となり、ひいては文化財愛護の精神を醸成する手がかりとなることを心から願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解・ご協力をいただきました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月27日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は大野城市教育委員会が実施した、福岡県大野城市瓦田五丁目97番所在の石勺遺跡O地点の報告書である。
2. 発掘調査は、坂井貴志が担当した。
3. 遺構実測および遺構写真の撮影は、坂井が行った。
4. 遺物写真は、(株)写測エンジニアリングに委託し、牛島茂が撮影した。
5. 遺物実測・拓本・製図は古賀栄子、木原堯が行ったほか、遺構図製図は山元瞭平が行った。
6. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
7. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
8. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
9. 本書に使用する出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会にて保管・管理している。
10. 本書の執筆・編集は山元・徳本洋一が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査成果	
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	5
IV. まとめ	8

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
第2図 調査地点位置図 (S=1/5,000)	4
第3図 調査区遺構配置図 (S=1/80)	5
第4図 出土遺物実測図1 (S=1/3)	7
第5図 出土遺物実測図2 (S=1/2、1/3)	8

表目次

第1表 出土遺物観察表	10
-------------------	----

図版目次

図版1 (1) 調査地全景1 (2) 調査地全景2 (3) 調査地全景3	
図版2 出土遺物1	
図版3 出土遺物2	
図版4 出土遺物3	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

調査対象地は大野城市瓦田五丁目97番であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「石勺遺跡」にあたる。対象地については、事業者から個人住宅の建設に先立ち埋蔵文化財の照会があり、平成27年12月に試掘調査の依頼書・承諾書が提出された。これに基づき、平成28年1月5日および同年1月20日に試掘調査を実施したところ、現地表下125cm～130cmの深さで遺構を確認した。計画通りに工事が施工されると、土壌改良工により遺構が破壊されるため、保護措置について協議を行った。

事業者との協議の結果、遺構保護は設計上困難であることから、平成28年1月25日付で文化財保護法第93条に基づく届出を福岡県教育庁文化財保護課あてに提出し、平成28年1月27日付で発掘調査の指示が出された。また、平成28年1月25日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が大野城市教育委員会に提出された。

これを受け、平成27年度に発掘調査を行うことで協議が整い、平成28年2月1日から同年2月22日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は、70㎡である。なお、整理作業は令和元年度に実施した。

2. 調査組織

平成27年度・令和元年度における調査体制は以下の通りである。

平成27年度（発掘調査）

教育長	吉富 修			
教育部長	見城 俊昭			
ふるさと文化財課長	平田 哲也			
係長	石木 秀啓	徳本 洋一	白壁 伸太	
主任技師	上田 龍児	林 潤也	早瀬 賢	龍 友紀
嘱託（調査）	川村 博	坂井 貴志		
	澤田 康夫	藤井 恵美		
	藤川 貴久	森 貴教		

令和元年度（整理作業）

教育長	吉富 修			
教育部長	平田 哲也			
ふるさと文化財課長	石木 秀啓			
係長	林 潤也	佐藤 智郁	上田 龍児	
主査	徳本 洋一			
主任主事	秋穂 敏明			

技師	山元 瞭平	
主事（任期付）	鮫島 由佳	
囑託（調査）	澤田 康夫	木原 堯
囑託（啓発）	山村 智子	浅井 毬菜（12月まで）
囑託（庶務）	西村 友美	永松 綾子

整理作業員

小嶋のり子 白井 典子 津田 りえ 仲村 美幸 松本友里江 村山 律子
吉田 薫

II. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は福岡平野東南部の最奥部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市の中央には御笠川が流れ、西側から支流である牛頸川が注ぐ。石勺遺跡は牛頸川左岸の微高地上に位置し、現在の曙町から瓦田にかけて展開する。過去に14回の調査が実施されており、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。今回調査を実施した〇地点は瓦田五丁目97番に所在し、御笠川と牛頸川の合流地点付近にあたる。

2. 歴史的環境

これまでの調査の結果、石勺遺跡の主たる時期は弥生時代から奈良時代にかけてであることがわかっている。そこで、これらの時代における本市及び周辺の様相を見てみると、まず、市内の弥生時代には北部丘陵部、御笠川周辺の平野部に遺跡が広がる。前期の集落遺跡としては川原遺跡、仲島遺跡などが、墓地としては御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、本堂遺跡等が挙げられる。中期には森園遺跡で集落と墳墓が営まれ、後期に至ると仲島遺跡、森園遺跡、中・寺尾遺跡、本堂遺跡等で集落が展開する。本市周辺では、前期には板付遺跡で集落、金隈遺跡で墓地が広がり、中期になると春日丘陵一帯に須玖遺跡群と呼ばれる多くの遺跡が展開するようになる。

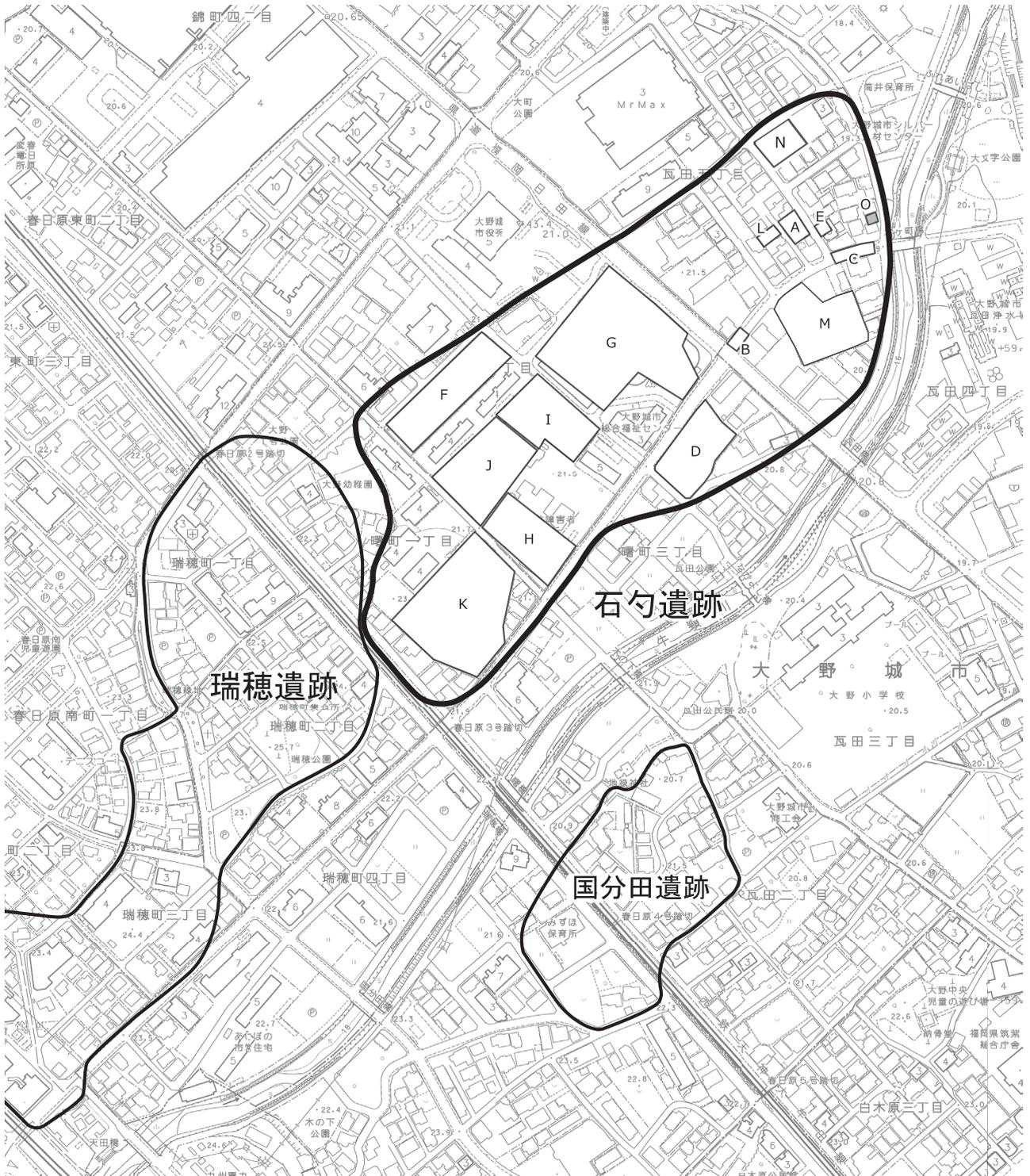
本市内には前方後円墳はないが、古墳時代中期には乙金山西麓で人々の生活が始まる。集落としては薬師の森遺跡が営まれ、古墳としては笹原古墳が築造される。古墳時代後期になると、市の北部では月隈丘陵から乙金山山麓にかけて大規模な群集墳が展開する。一方、市の南部では中通古墳群、塚原古墳群等が築造される。集落遺跡としては、上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡等が挙げられる。また、牛頸窯跡群では須恵器生産が拡大される。

奈良時代には大宰府政庁や官道が整備され、本市の谷川遺跡でも官道のうち水城西門ルートの一部が確認されている。また、牛頸窯跡群では引き続き須恵器生産が盛んにおこなわれる。



1. 仲島遺跡 2. 川原遺跡 3. 御笠の森遺跡 4. 宝松遺跡 5. 村下遺跡 6. 雑餉隈遺跡 7. 錦町遺跡 8. 石勺遺跡 9. 瑞穂遺跡
10. 国分田遺跡 11. 原ノ畑遺跡 12. 大道端遺跡 13. 後原遺跡 14. 御供田遺跡 15. 九州大学構内遺跡 16. ハザコ遺跡
17. 梅頭遺跡群 18. 本堂遺跡群 19. 上園遺跡 20. 出口遺跡 21. 末次遺跡 22. 谷川遺跡 23. 唐土遺跡 24. 水城跡
25. 塚口遺跡 26. 御陵古墳群 27. 御陵前ノ椽遺跡 28. 乙金北古墳群 29. 善一田古墳群 30. 王城山古墳群 31. 古野古墳群
32. 松葉園遺跡 33. 森園遺跡 34. ヒケシマ遺跡 35. 中・寺尾遺跡 36. 御手洗遺跡 37. 花園遺跡 38. 原口遺跡
39. 薬師の森遺跡 40. ウド遺跡 41. 榎町遺跡 42. 银山遺跡 43. 雉子ヶ尾遺跡 44. 雉子ヶ尾古墳群 45. 雉子ヶ尾遺跡Ⅲ
46. 原田遺跡 47. 曲目遺跡 48. 金山遺跡 49. 金ヶ浦遺跡 50. 釜蓋原古墳群

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 調査地点位置図 (S=1/5,000)

Ⅲ. 調査結果

1. 調査概要

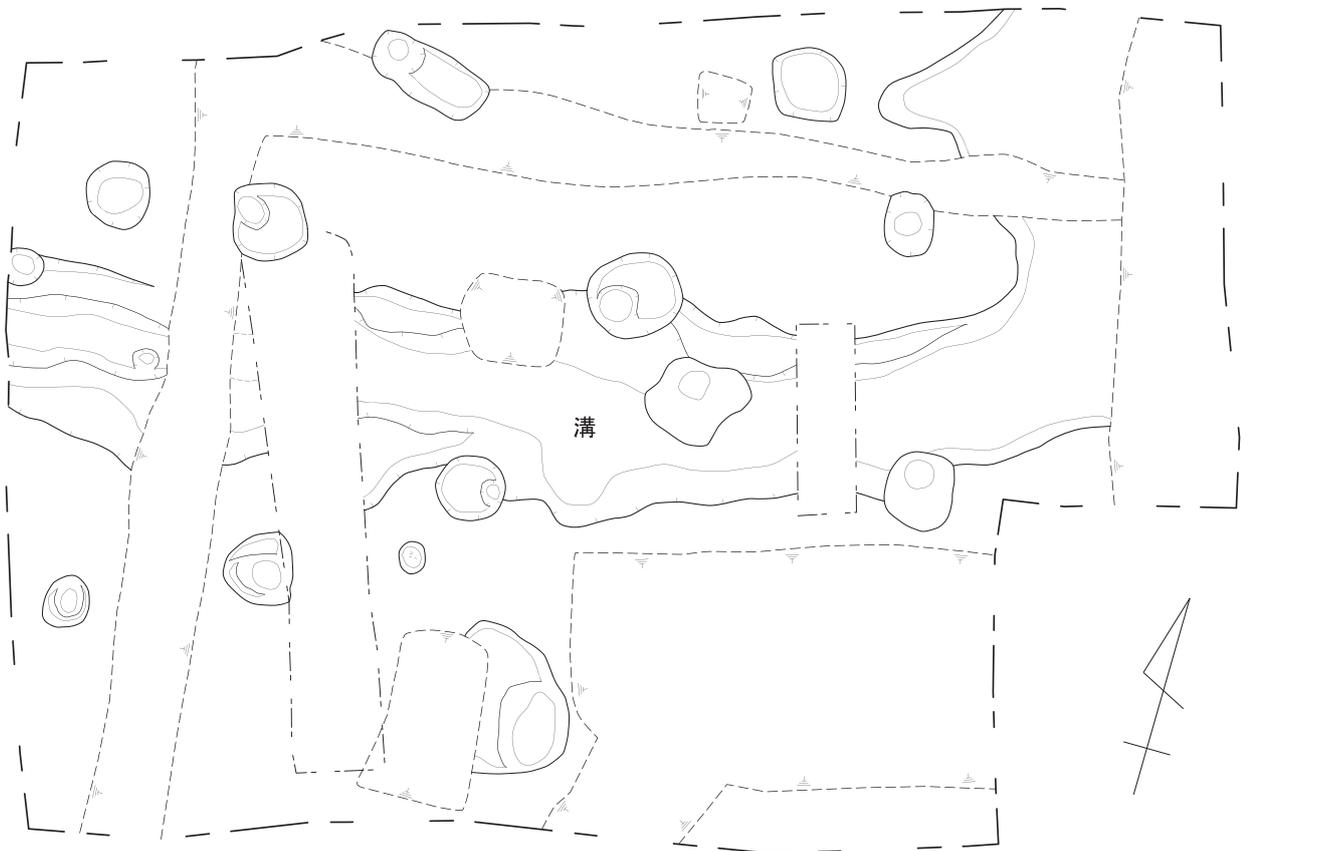
調査地は大野城市瓦田五丁目97番に所在する。調査面積は約70㎡である。調査地は春日丘陵から伸びる舌状の低丘陵の先端に位置し、牛頸川の左岸に位置する。調査前は宅地であった。事前に実施した試掘調査の結果、現地表下より120cmまで客土、その下10cmまで黒褐色粘質土の遺物包含層が堆積していた。この遺物包含層を除去すると、しまりの強い黒褐色粘質土が確認され、この面が遺構検出面となる。

調査の結果、溝1条のほか、複数のピットを確認した。遺物は弥生土器、土製品、石器などが出土した。

2. 遺構と遺物

(1) 溝 (第3図、図版1)

調査区を横断する形で検出された。幅は1～1.5m、深さは最大で約0.15mを測る。西から東に高低差があることから、東に向かって流れていたことが分かった。遺物は、埋土中の広い範囲から大量に出土しており、水流によって運ばれてきたものと思われる。ほとんどが弥生土器で、時期は弥生時代中期初頭から中頃のものである。



第3図 調査区遺構配置図 (S=1/80)



出土遺物（第4、5図 図版2～4）

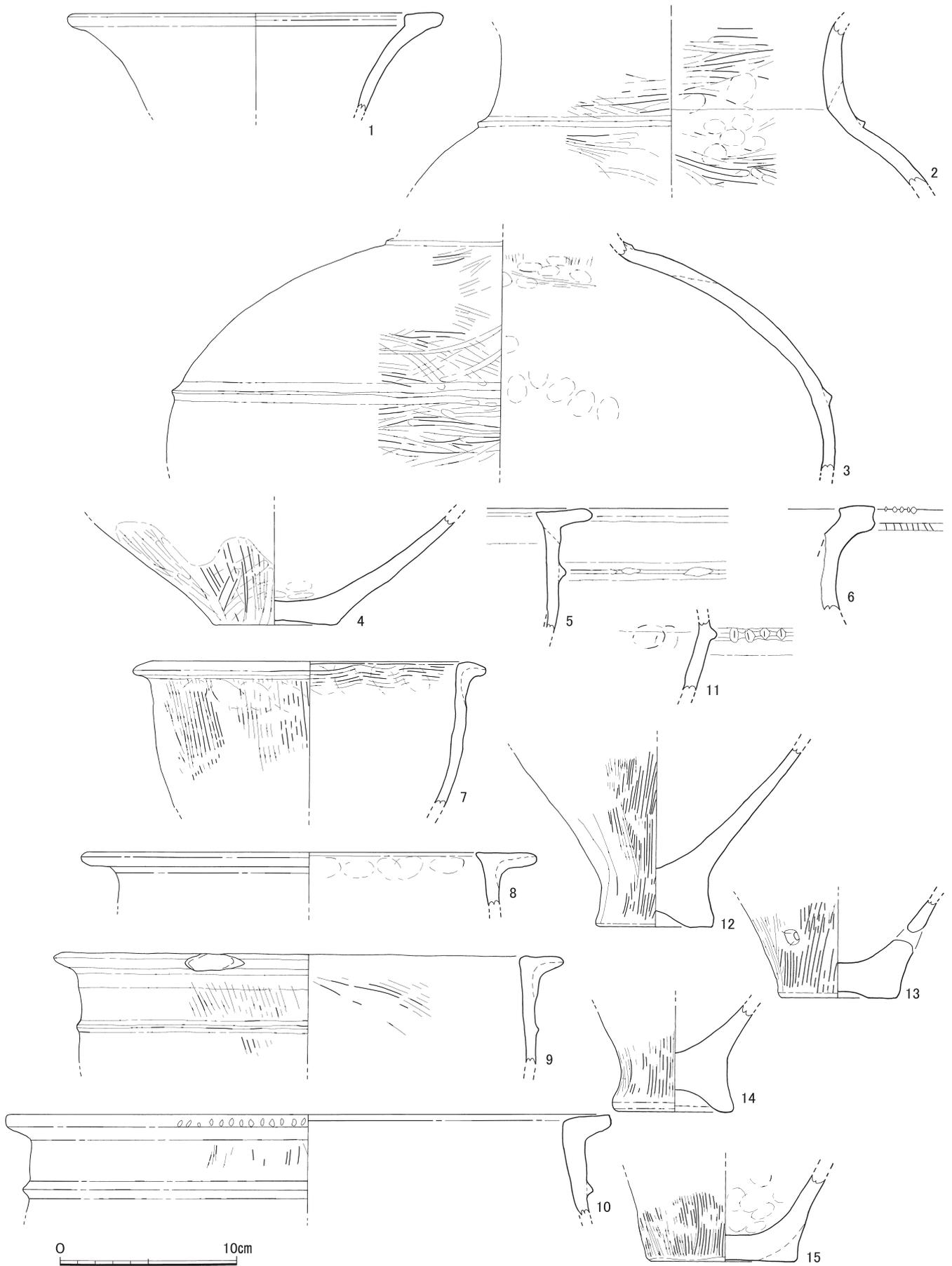
弥生土器（1～18）

1～4は壺である。1は鋤先状口縁の小破片で、残存高5.6cm、復元口径21.4cmを測る。内外面とも摩滅が激しく、調整は不明である。2は頸部から体部上位の破片で、頸部付根に突帯が1条めぐり。残存高9.4cm、頸部径は復元で19.4cmを測る。全体に摩滅しており、調整が分かりにくい。内外面ともミガキ後不定方向のナデ、内面には指オサエが認められる。3は体部上位から頸部付根にかけての残存で、残存高13cm、体部最大径は復元で37.9cmを測る。2条の突帯がめぐり。調整は、外面にミガキ、内面には指オサエ、不定方向のナデを施し、わずかにハケ目が残る。4は底部の破片で、残存高6.3cm、底部径7cmを測る。外面はミガキの上、部分的に丹塗りが残る。内面は摩滅のため調整不明だが、部分的に指オサエが認められる。

5～15は甕で、5～10は口縁部付近の破片である。5は、口径は復元できないが残存高7.2cmを測る。1条の細い突帯がめぐり、2ヶ所で突帯を指先でつぶしたような痕跡が見られる。口縁部内外面に回転ナデの痕跡がわずかに認められるが、それ以外の調整は摩滅のため不明である。6も口径が復元できないが、残存高は6cmで、口縁部に刻み目と線刻が施されている。7はやや小振りの甕で、残存高8.4cm、復元口径19.9cmを測る。調整は、体部外面に粗い縦方向のハケ目と指オサエを施す。内面は摩滅のためよく分からないが、部分的に粗い横方向のハケ目と指オサエの痕跡が認められる。8は残存高3.1cm、復元口径25.9cmを測る。調整は内外面ともに摩滅のため不明である。9は残存高6.3cm、復元口径29cmを測り、細い突帯が1条めぐり。調整は、体部外面にハケ目、口縁部内外面に回転ナデを施す。内面は摩滅のため分かりにくい。ハケ目のあと不定方向にナデているようである。10は残存高5.7cm、復元口径34.4cmを測り、1条の突帯がめぐり。調整は、体部外面にハケ目と回転ナデが認められるが、体部内面は摩滅のため不明である。口唇部に0.5～0.7cm間隔で刻み目を施す。11は体部の小破片で、残存高、4.2cmを測るが、径は復元できなかった。刻み目突帯がめぐり。外面に回転ナデを施すが、内面の調整は摩滅のため不明である。胎土中に白色砂粒が目立つ。12～15は底部破片である。12は残存高10.2cm、底部径6.7cmを測る。体部外面にハケ目を施し、底部外面と内面は不定方向のナデ。13は残存高5.7cm、底部径6.8cmを測る。体部外面にハケ目を施すが、それ以外の部分の調整は摩滅のため不明である。底部付近に1ヶ所の焼成前穿孔がある。14は残存高6.1cm、底部径6.9cmを測る。体部外面にハケ目を施すが、それ以外の部分の調整は摩滅のため不明である。胎土中に白色砂粒が目立つ。15は残存高5cm、底部径8.6cmを測る。体部外面にはハケ目、底体部内面には指オサエを施す。内面が黒変している。

16は鉢の底部破片である。残存高4.6cm、底部径12.3cmを測り、底部は厚い。内外面とも摩滅のため調整は不明だが、底部外面が黒変している。

17・18は器台である。17は残存高12.7cm、復元口径9cmを測る。全体に摩滅が激しく、調整はほとんどわからないが、体部外面の一部にわずかにハケ目の痕跡が認められる。18は残存高5.5cm、復元底径7.6cmを測る。器壁は厚く、約2.3cmを測る。内外面とも指オサエを施し、内面にわずかにシボリ痕が認められる。



第4図 出土遺物実測図1 (S=1/3)

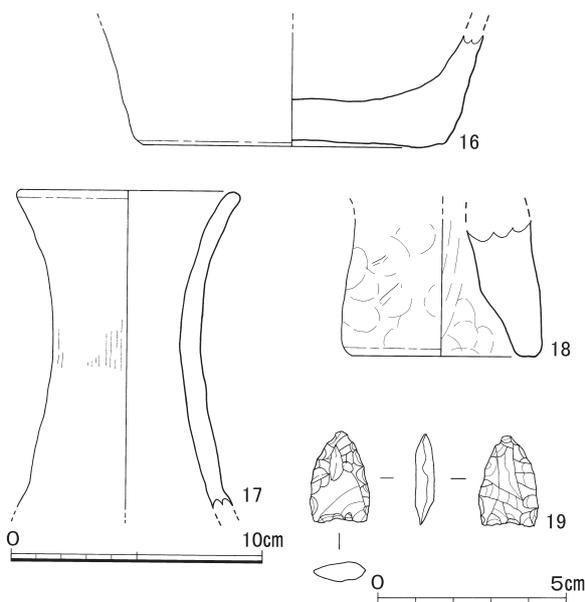
石器

石鏃 (19)

サヌカイト製で、基部にわずかに抉りが入る。
長さ2.4cm、最大幅1.5cm、最大厚さ0.5cmを測る。

(2) ピット (第3図、図版1)

調査区全面から検出されたが、それらのうち10基は直径0.4～0.6m、深さ0.6m前後としつかりしたもので、比較的大型の建物の柱穴であった可能性がある。ただし、調査面積が狭小なので、詳細は不明である。埋土中から弥生土器が出土しているが、小片のため図示することができない。時期は弥生時代中期末頃である。



第5図 出土遺物実測図2 (16～18は1/3、19のみ1/2)

IV. まとめ

石勺遺跡において、これまでに合わせて14回実施した発掘調査を通じて得られた、現状で考えられる集落の変遷と、O地点調査の意義、さらに今後の課題についてまとめておきたい。なお、各調査地点の位置関係については、第2図に示したとおりである。

(1) 弥生時代

石勺遺跡における集落の始まりは、今のところ弥生時代中期初頭と考えられる。この時期に、O地点、M地点など標高が比較的低く(約20m)、牛頸川に接した場所で集落が営まれ始める。

一方同時期の墓地は、H地点、K地点など比較的高く(約22～23m)、牛頸川から離れた場所で営まれている。このような状況は、弥生時代中期以降、終末期まで続いていたようである。

この集落は牛頸川西岸の、川にごく近い場所に営まれており、C地点では弥生時代中期中葉の集落の一部が牛頸川の水流によって削り取られた痕跡が確認されている(註1)。最終的には、弥生時代終末期頃に牛頸川や御笠川の河川氾濫が生じた痕跡があり(註2)、それ以降この集落は廃絶する。

このような場所に集落が営まれた理由については、川の水利を利用するため、牛頸川と御笠川の合流点に占地する必要があったためなどと考えられる。

(2) 古墳時代

古墳時代になると様相は一変する。弥生時代終末期まで墓地が営まれたK地点で、新たな集落が形成される。

まず前期前半には、K地点で検出された竪穴住居跡の中で銅鏃、青銅製鋤先、ガラス小玉等の希少財が出土しており、周囲との格差が存在したことを示している。これらに加えて、前期前半の竪穴住居跡から多孔式甗が、前期末から中期初頭の竪穴住居跡から軟質土器深鉢が出土している。こ

れらはともに当時の朝鮮半島との交流を示す遺物で、特に後者は朝鮮半島からの渡来人が作成した可能性が指摘されている。このように、石勺遺跡の集落は、K地点を中心とするやや標高の高い場所で営まれ、中世まで存続したことが確認されている。また、このK地点における朝鮮半島系遺物の出土から、古墳時代前期から中期初頭にかけては、石勺遺跡の集落が周囲の同時期の集落に対して最も有力かつ先進的であった時期であると考えられる。ただし、このような状況は後代に継続することはなく、古墳時代中期以降では朝鮮半島との交流の痕跡は確認されていない。

一方、古墳時代中期になるとK地点から北東に約250m、標高約20mと比較的低いD地点（未報告）に滑石製品の工房と推定される竪穴住居跡を有する集落が営まれ、滑石製の白玉、有孔円盤、紡錘車等を大量に生産するようになる。D地点では、これら滑石製品の他に大量の未成品が出土しており、その製作過程を考えるうえで重要である。

(3) 奈良時代以降

K地点では奈良時代も集落が継続し、竪穴住居跡や溝が検出されている。K地点の真北に当たるJ地点は、奈良時代には墓地として使われ、蔵骨器を伴う火葬墓が1基検出されている。また、これまでで最も新しい時期の遺構は、14世紀半ばの溝である。

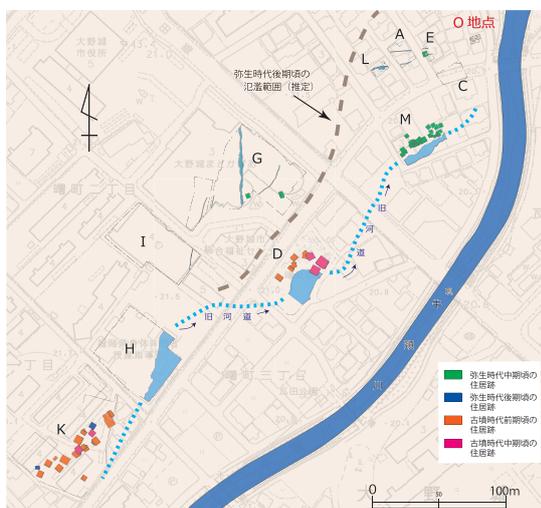
(4) O地点調査の意義と今後の課題

以上、石勺遺跡の変遷について見てきたが、O地点調査の意義と石勺遺跡の発掘調査における今後の課題について考えて結びとしたい。

O地点調査の意義としては、石勺遺跡の包蔵地のうち、牛頸川西岸所には弥生時代中期の集落が広がっていることが改めて確認されたことである。今後は、この集落がどこまで広がっているかを確認することが必要である。東西にはほぼ一直線に並び、同じような様相を呈するA、E、O地点と、それらからわずか50m北に位置するN地点とでは、遺跡の様相が異なる。今後周辺の発掘調査により、集落の範囲を確定したい。

註1 丸尾博恵、向直也 編『石勺遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第52集 1998 p. 53

註2 渡邊和子 編『石勺遺跡6』大野城市文化財調査報告書第108集 2013 p. 99



第6図 牛頸川旧河道復元図(案)

参考文献

- 石木秀啓 編『石勺遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第47集 1996
- 舟山良一 編『石勺遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第50集 1997
- 丸尾博恵、向直也 編『石勺遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第52集 1998
- 丸尾博恵 編『石勺遺跡Ⅳ』大野城市文化財調査報告書第56集 1999
- 舟山良一 編『瑞穂・原ノ畑遺跡』大野城市文化財調査報告書第57集 2001
- 早瀬賢、林潤也 編『石勺遺跡Ⅴ』大野城市文化財調査報告書第97集 2011
- 渡邊和子 編『石勺遺跡6』大野城市文化財調査報告書第108集 2013
- 藤川貴久、柴田剛、澤田康夫 編『石勺遺跡7』大野城市文化財調査報告書第164集 2018

第1表 遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	法量 (cm・g) ①口径 ②器高③底径④最大径 ※ (復元値) (残存値)	形態・技法の特徴	A : 胎土 B : 焼成 C : 色調	備考
1	弥生	甕	① (21.4) ② (5.6)	内外 摩滅のため不詳	A : 1～2mmの白・黒・灰色砂粒を多く含む B : 良好 C : 内7.5YR8/1灰白色、外7.5YR8/2灰白色	
2	弥生	壺	② (9.4) 頸部径 (19.4)	外面 ミガキ後ナデ 突帯1条 内面 ミガキ後ナデ 指オサエ	A : 1～3mm以下の白色砂粒、輝石、長石、角閃石、 雲母を多く含む B : 良好 C : 内5YR7/6橙色、外 5YR6/4にぶい橙色	3, 4 と同一 個体か?
3	弥生	壺	② (13.0) ④ (37.9)	外面 突帯2条 ヘラミガキ 内面 不定方向のナデ 指オサエ	A : 2mm以下の白色砂粒、輝石、長石、雲母含む B : 良好 C : 内5YR6/4にぶい橙色 外5YR7/4～ 5/6にぶい橙色～明赤褐色	2, 4 と同一 個体か?
4	弥生	壺	② (6.3) ③7.0	外面 体部ヘラミガキ 底部ナデ 内面 指オサエ	A : ～2mmの白色砂粒、石英、長石、雲母含む B : 良好 C : 内5YR6/4にぶい橙色、外10R6/8赤橙 色～10R2/1赤黒色	2, 3 と同一 個体か?
5	弥生	甕	② (7.2)	口縁部 内外回転ナデ 外面 突帯1条	A : ～1mmの白色・黒色砂粒、石英、角閃石、雲母 含む B : 良好 C : 内外5YR7/6褐色	
6	弥生	甕	② (6.0)	内外 不定方向のナデ	A : ～3mmの白色砂粒含む B : 良好 C : 内10YR6/3にぶい黄褐色 外10YR5/2灰黄褐色	口縁部に刻み 目と練刻あり
7	弥生	甕	① (19.9) ② (8.4)	外面 ハケメ 指オサエ 口縁部 回転ナデ ハケメ 内面 指オサエ	A : ～3mmの白色砂粒、石英、長石、角閃石、雲母 多く含む B : 良好 C : 内外5YR7/6褐色	
8	弥生	甕	① (25.9) ② (3.1)	口縁部 内外回転ナデ 内面 指オサエ	A : 微細な白色・黒色・褐色砂粒、雲母含む B : 良好 C : 内5YR6/6～5YR5/3褐色～にぶい赤 褐色 外7.5YR8/2～5YR7/6灰白色～褐色	一部に煤付着
9	弥生	甕	① (29.0) ② (6.3)	外面 ハケメ 突帯1条 内面 ハケメ後ナデ 口縁部 内外面回転ナデ	A : ～2mmの白色砂粒、長石、雲母含む B : 良好 C : 内7.5YR7/4にぶい橙色 外7.5YR6/6褐色	
10	弥生	甕	① (34.4) ② (5.7)	外面 ハケメ 口縁部回転ナデ 突帯1条 内面 摩滅のため不詳	A : 径約2mmの白色砂粒含む B : 良好 C : 内5YR7/6褐色 外5YR7/8褐色	口唇部に0.5 ～0.7cm間 隔で刻み目を施 す
11	弥生	甕	② (4.2)	外面 回転ナデ 刻み目突帯1条 内面 指オサエ	A : ～3mmの白色砂粒、長石、雲母含む B : 良好 C : 内外5YR7/4褐色	
12	弥生	甕	② (10.2) ③6.7	内外 ハケメ 底部外面 不定方向のナデ	A : ～3mmの白色砂粒含む B : 良好 C : 内10YR8/4～10YR4/4浅い黄橙～褐色 外7.5YR7/8～7.5YR3/4黄橙～暗褐色	
13	弥生	甕	② (5.7) ③6.8	外面 ハケメ 内面 摩滅のため不詳	A : ～3mmの白色砂粒、長石、雲母含む B : 良好 C : 内5YR4/1褐灰色 (5YR2/1煤付着)、外5YR6/6橙 色	体部下位に穿 孔あり
14	弥生	甕	② (6.1) ③6.9	外面 ハケメ 内面 摩滅のため不詳	A : ～2mmの白色砂粒、石英、長石、雲母を多く含 む B : 良好 C : 内5YR4/1褐灰色 外5YR6/8褐色	
15	弥生	甕	② (5.0) ③8.6	外面 ハケメ 内面 指オサエ	A : ～2mmの砂粒、角閃石、石英、長石、雲母含む B : 良好 C : 内7.5YR2/1黒色 外10YR8/2灰白色	
16	弥生	鉢	② (4.6) ③12.3	内外 摩滅のため不詳	A : ～4mmの白色砂粒、石英、長石、雲母含む B : 良好 C : 内5YR7/6褐色、外5YR7/6赤褐色 (5YR2/ 1黒斑)	
17	弥生	器台	① (9.0) ② (12.3)	外面 一部にかすかにハケメ残る 内面 摩滅のため不詳	A : ～2mmの白色砂粒、長石含む B : 良好 C : 内外10YR8/2灰白色	
18	弥生	器台	② (5.5) ③ (7.6)	外面 指オサエ 内面 指オサエ シボリ痕	A : ～2mmの白色砂粒、角閃石、雲母含む B : 良好 C : 内5YR6/6褐色、外7.5YR5/6明褐色	
19	石器	石鏃	全長2.4 最大幅1.5 最大厚0.5			サヌカイト製

圖 版



(1) 調査地全景 1



(2) 調査地全景 2



(3) 調査地全景 3



1



4



2



5



6



3



7



8



11



9



12



10



13

图版4



14



17



15



18



16



19-1



19-2

出土遺物3

報告書抄録

ふりがな	こくじゃくいせき							
書名	石勺遺跡 8							
副書名	○地点の調査							
巻次	8							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第179集							
編著者名	山元瞭平							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2020年03月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こくじゃくいせき 石勺遺跡 ○地点の調査	ふくおかけんおおのじょうしかわらだ 福岡県大野城市瓦田5丁目97番	40219		33° 32' 11"	130° 28' 55"	20160201 ～ 20160222	約70㎡	個人専用 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石勺遺跡 ○地点の調査	散布地・ 集落	弥生	流路・柱穴	弥生土器				
要約	<p>○地点の調査では、流路1条、掘立柱建物跡となり得るであろう柱穴10基を確認した。</p> <p>流路は、調査区中央を西から東へ流れ、幅1.0～1.5m、深さ0.1～0.15mほどである。埋土の観察から、急激に埋没が進んだ状況が見て取れた。遺物は、弥生時代中期初頭から前半の土器が一括で出土した。</p> <p>柱穴は、径0.4～0.55mの隅丸形状を呈し、深さは検出面より0.6～0.65mを測った。出土遺物から、弥生時代中期末頃のものと思われる。</p>							

大野城市文化財調査報告書 第179集

石勺遺跡 8

令和2年3月27日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5